

# モルディブ ECD 幼稚園プロジェクトにおける事業拡大に関する考察 —経験重視型アプローチの有効性を探る—

北原 照美

## 1. 研究の目的と方法

本研究の目的は、モルディブ ECD 幼稚園プロジェクト実施において、子どもや大人全ての当事者が改善の機会を最大限有効に活かすために、支援者はどのように取り組めばよいのかを見出すことにある。

モルディブ ECD 幼稚園プロジェクトとは、モルディブ教育省教育開発センターがモルディブユニセフと連携し、2001年よりを実施している幼児教育改善プロジェクトである。ECDとは、「Early Childhood Development」の略で、近年、開発協力の世界において多くの国際援助機関が注目している取組みである。ユニセフは「ECDは出生時から8歳になるまでの子どもと、その親や保護者のための政策とプログラムに関する包括的なアプローチを指し、子どもが持って生まれた認知的、情緒的、社会的、身体的能力を十分に伸ばす権利を守ることを目指す。」と謳っている。本プロジェクトの主たる目的は、子どもたちの能力を包括的に伸ばすために、幼稚園に「経験重視型教育法 (Play based learning methodology)」を普及し、根付かせていくことにある。

本プロジェクトは、モルディブ教育省、モルディブユニセフ両機関を中心に、全国に5園あるモデル幼稚園にて様々な立場の人々が意欲的に取り組み、概ね良好な成果を出してきた。そのため、事業が2年目を過ぎたころから、モデル幼稚園の回りの幼稚園へ経験重視型教育法の拡大推進を除々に始めた。そんな中、2004年末のスマトラ沖地震による津波でモルディブも多大な被害を被った。このことにより予期しなかった多額の支援金が入り、プロジェクトの流れは大きく影響を受けることとなった。多額の支援金は、確かに短期間の間に、環境の改善という点において、目に見える大きな変化をもたらした。しかし、多くの島で実施した本プロジェクトは、その場限りで終わって経験重視型教育法が根付かない幼稚園が散見された。ただし、一方で、自分たちで経験重視型教育法を取り入れるために、自発的に情報を集め、主体的に改善を進め、しかも、その過程を楽しんでいる幼稚園があった。なぜ、幼稚園によってそのような差が出るのか。プロジェクト推進側が、どのように取り組めば、すべての当事者が最大限に改善の機会を活かすことができるのか。

そこで筆者が注目したのが、プロジェクトが推進している“幼児教育現場における「経験重視型教育方法」”そのものを、“ECD事業推進のための方策”として取り入れ、「経験重視型アプローチ」として取り組む、ということである。本論文では「経験重視型アプローチ」の有効性について検証し、実践において支援者が考慮すべき要素を見出していく。

研究方法は、先行研究の文献調査とフィールド調査である。フィールド調査の方法は、①参与観察、②ケーススタディ、③インタビュー調査 (インフォーマル・フォーカスグループ)、④KJ法による参加型調査、⑤アンケート調査の5つである。フィールド調査の中でも、特にインタビューとKJ法では、実に多くの興味深い話を聞くことができた。それらは、本論文の中に生の声として織り交ぜてある。アンケート調査では見えてきにくい本音や理由などは、プロジェクトを進める上で把握しておくべき力強い真実であると判断したからである。アンケート調査からは決して見えてこなかった人々の思いと表情は、調査の貴重な収穫物であった。

## 2. 論文の構成

### 序章

- 0-1：研究の目的
- 0-2：研究の背景
- 0-3：研究の方法
- 0-4：本論文の構成

### 第1章 世界の国際教育協力への取り組み

- 1-1：世界の国際協力の流れ
- 1-2：1999年の二つの政策文書
- 1-3：ECDの効果と普及
- 1-4：国際機関によるECDの取り組み

### 第2章 参加型開発と経験重視型アプローチ

- 2-1：参加型開発の理念
- 2-2：経験重視型アプローチ

### 第3章 モルディブ共和国の幼児教育概観

- 3-1：モルディブ共和国の概観
- 3-2：モルディブ共和国における教育の歴史
- 3-3：子どもたちを取り囲む現在の状況
- 3-4：幼児教育の現状と課題

### 第4章 モルディブにおけるECD事業と経験重視型教育法の普及

- 4-1：ECD事業の成立背景
- 4-2：ECD事業概要

### 第5章 変化の過程と事業の影響に関する考察

- 5-1：ECDモデル幼稚園における影響
- 5-2：津波被害からの復興プロジェクトの幼稚園の事例と考察
- 5-3：変化の過程と事業の影響に関する考察
- 5-4：ECD課スタッフの変化と考察

### 第6章 まとめ

- 6-1：まとめ
- 6-2：おわりに

### 参考文献

## 3. 論文の概要

第1章では、世界の国際教育協力の変遷を述べたあと、本論文で取り上げているECDについて、その概容を解説する。ECDは、近年、開発協力の世界において多くの国際援助機関が注目しているものである。代表的な国際機関のECDへの取り組みも合わせて紹介する。

第2章では、参加型開発について取り上げる。筆者は、経験重視型教育法の考え方は、参加型開発の理念と類似している点が多いためと考えており、参加型開発の先行研究と照らし合わせながら、「経験重視型アプローチ」の有効性について検証する。

第3章では、モルディブ共和国の一般的概況と、子どもたちのおかれている状況について説

明し、研究フィールドの基礎的な情報を提示する。その後、モルディブの教育の流れ、現在の課題について解説する。

第4章は、モルディブにおけるECD事業と経験重視型教育法の普及の変遷について述べる。当初、ECD幼稚園プロジェクトはECD事業の1つにすぎなかったのだが、それが初の幼児教育分野の課—ECD課となって発展してきている。ECDモデル幼稚園への普及の過程においては、プロジェクト実施側の一方的な計画で、現実には意図したどおりに事は運ばず、プロジェクトの内容を変更せざる得ないことがあった。しかし、その変更も含めてECDモデル幼稚園は改善を重ねてきた。教員も保護者も試行錯誤し、ときに大反対もしつつ、幼児の成長を見て理解を深めるだけの時間が比較的ゆるやかにあったことの意味は大きい。これと対象的な流れを作ったのが2004年のスマトラ沖地震による津波被害への多大な援助金である。この津波復興プロジェクトによる事業への影響も合わせて検証する

第5章では、事例を紹介しながら、ECD課のアプローチの仕方や、園の関係者の関心の違いから起きてくる、変化の過程と事業の影響の違いを考察する。

ECDモデル幼稚園における実践事例からは、課題はあるものの経験重視型教育法自体の利点は明確となった。そして、改善を進めることができた要因として「人材」と「時間」を多用してきたことを指摘する。

津波復興プロジェクト幼稚園の五つの事例からは、経験重視型教育法の導入自体は短時間でできて、プロジェクト実施側の一方的な思いや、園関係者の表面的な変化だけを追う姿勢では、本当の意味で、幼児が育つ教育環境の改善を起こすことはできないことを明らかにした。プロジェクトを行う前に、各幼稚園が経験重視型教育法のことをきちんと理解し、園が本当にそれを望むかどうか、自分たちだけでも続けていく覚悟や意欲があるかどうかを把握することは最低限必要である。

事例の一つでは、当事者が教育環境の改善を望みつつも、その内容がECD幼稚園プロジェクトの目的と合致しない限り、援助が受けられないという現実があることを紹介した。大きなプロジェクトの中で予算や計画が明確に組まれている場合、目的を逸脱した支援をすることは困難である。しかし、プロジェクトの核は確固として保ちつつも、もう少し緩やかな枠組みで当事者のニーズに寄り添い、改善を進めていくことが、プロジェクト自体に厚みを加えていく、と指摘した。

最後に挙げた事例は、筆者が理想的と考えるものであり、ECDモデル幼稚園と同じような人材を投資しなくとも、当事者が主体的に動き、自ら改善している幼稚園である。自らが改善を欲し、その実現のために試行錯誤する過程があり、そして、適切でタイミングのよい外部からの援助がそこに持ち込まれることで、効果は倍増している。こういった幼稚園は持続的にECD課と連携をとりつつ、自分たちで努力を重ねて幼児教育にあたっていくことであると考察する。

この事例と同じことが他の園でも起こりやすくするための方策を立てることが効果をあげるための鍵である。五つの事例から学んだことは多いが、その中でも反面教師的な学びは、当事者が望みもしないうちから、支援だけが勝手にやってきてしまうことは問題だという点である。つまり、現場からの要望も興味も示されないうちにただ物的環境だけを変えてもそれは機能しないということ。物的環境の改善は必要である。しかし、もっと必要なのは改善したいという当事者の意欲である。意欲というのは、プロジェクトから、はいどうぞ、と用意して渡せるものでなければ、地域内で支援者が探しだすものでもない。プロジェクトを推

進する ECD 課スタッフはまず、当事者を触発し、内から沸いてくる意欲を掻き立てることから始めなければならない。当事者たちは、欲しいと自ら願えば、それが苦勞であっても自分たちで行動に移し、手に入れ、満足感を味わい、さらに意欲的に取り組むようになる。現に事例に出てくる幼稚園の教員は、自費で近隣の島の ECD 幼稚園の視察に行ったり、保護者とお金を出し合って、環境改善を進めた。他園でも、家事を犠牲にし、家族の反対を受けても幼稚園に勤め続けようとした教員、仕事が以前より大変になったと言いつつも今の方が楽しいという教員、収入が以前よりも格段落ちても幼児のための仕事ができることが嬉しいという園長たちがいた。その理由は、自分たちが欲しいと望んだものであり、そこから、充実感や達成感を得ることができるからであろう。人々は自分たちで決めたことは責任をもってやり遂げようとし、地域に対して何か“できる”ということ、“役に立つ”ということに喜びを感じる。その充実感と達成感によって、自信をつけ、さらなる課題へと取り組む勇気を得、能力を伸ばしていく。

こう考えてみると、開発・改善というのは、ある特定の「状況」を良くすることよりも、どんな状況においても意欲的に取り組む「人」が増えるような働きかけをすることが重要である、といえる。そして、意欲的に取り組む人が増えていくための働きかけとして経験重視型アプローチが有効だと本章で導き出す。

第 6 章では、経験重視型アプローチを定義し、教育開発現場で経験重視型アプローチを取り入れる場合に、支援者が考慮すべき要素を 7 点に集約しまとめる。

筆者の考える経験重視型アプローチの定義とは、「当事者が、環境や人との関わりの中で、自ら考え、観察し、行動しながら、物事を改善していこうとする姿勢を育てるためのアプローチである。焦点は、当事者が経験や他人との相互関係の中で自分自身の理解を蓄積していくことであり、核となるのは、この過程そのものである。経験重視型アプローチにおいて、支援者は、当事者の行う改善を助長促進するためのリソースであり、また共に成長する人として位置づけられる。」である。

そして、経験重視型アプローチで改善を機能させるために、支援者が考慮すべき要素とは、①当事者が試行錯誤できる十分な時間の確保、②興味・関心を抱くための働きかけ、③意欲を高めるタイミングのよい支援、④経験から学ぶ課程を核とする視点、⑤人は人との関わりから成長するという視点、⑥当事者の充実感・達成感に重きを置く視点、⑦支援者のリソースとしての役割の認識、の 7 点である。

経験重視型アプローチで取り組むとは、教育分野で長年にわたり多くの教育者たちによって主張され続けてきた、学ぶ課程そのものを重視する考え方を、教育開発のアプローチとして発展させ、活用しようとする試みである。それは筆者が人は年齢や状況を問わず、人が潜在的に持っている能力を伸ばしていくのは、自分で選択し、責任を任せられ、主体的に取り組むときであり、充実感や達成感を味わうことで意欲を湧かせ、さらに伸びていくことができるということを確認しているからである。